

赤坂先生

大森 海太

今から十年近く前、早稲田大学の公開講座で非常勤講師の赤坂恒明先生の「モンゴル帝国盛衰史」を聴講した。先生は口八丁手八丁で話が面白く、講義の合間にはモンゴル高原の遊牧民の一弦琴やノド歌などのCDを聞かせてもらった。楽しいのでこれに続くいくつかの講義を受け、大元ウルス（元朝）やそのほか中央アジア諸汗国の興亡についてもいろいろと教えられた。岡田英弘先生の「世界史の誕生」のテーマとなる世界である。

当時赤坂さんは四十代前半で独身、専攻はジユチウルス（キプチヤック汗国）で、この分野の研究では世界的な権威なのだそうだが「これだけでは生活保護一歩手前、とてもじゃないけど嫁なんかもらえませんよ」と言っただけを笑わせる。

ところで歴史の研究とは想像以上に厳しいものようである。とにかく原文で一次史料を読みこなすことが不可欠で、モンゴル語や中国語の史料はもとより、この方面では第一級の文献とされる、十四世紀初、イル汗国の宰相ラシード・ウッディーンが著した『集史』を読むために「ペルシャ語を二週間でマスターしました。言葉の順序は英語と同じだから、なんとかかりますよ」だとか。

もっともこれは辞書を引けば文章が読めるということで、日常会話までマスターされたのではないだろう。

このような専門家の学術論文とは違って、ふだん目にする歴史書とか歴史読み物のたぐいは、二次、三次史料をもとにしたもので、なかには勝手な思い込みや面白おかしくするための創作も少なくない。

あるとき赤坂先生に「いつか我々にも読みやすいような一般向けの本を書いてくださいよ」とお願いしたことがあったが、その後先生は内モンゴル自治区の某大学から客員教授の話があったとかで、いそいそと行かれてしまっただけの希望は実現していない。

コロナになって公開講座もオンラインになったのでご無沙汰しているが、いざれ近いうちに赤坂先生から内モンゴルや新疆ウイグルの実態をナマで伺いたいものである。